

精神遅滞児のごっこ遊びに関する事例的研究

— 行為の系列化ならびに象徴的行動

の発達との関連で—

今 野 和 夫

A Study on the Symbolic Play of a Mentally Retarded Child — Developmental Changes in Action Sequences and in Symbolic Behavior —

KAZUO KONNO

I はじめに

近年、健常乳幼児のごっこ遊びの発達過程に関する知見に基づき、精神遅滞児におけるごっこ遊びの発達過程を明らかにしようとする研究や、精神遅滞児に対してごっこ遊びの発達を促そうとの試みが増加しつつある(笹生・隅田ら, 1981¹⁾; Garwood, 1982²⁾; Yawkey, 1982³⁾)。たとえば Hill & Nicolich (1981)⁴⁾ は、ダウン症児30名(CA20~52か月, MA12~26か月)のごっこ遊びについて、MAの増大に伴いその水準を高めて行くが、スプーンでカップの中をかきまぜ人形に飲ませるといった複数行為の系列化(Nicolich, 1977⁵⁾では水準4に位置づけられている)に達しない者も多くいることを、指摘している。一方 McConkey & Jeffree(1979⁶⁾ 1980⁷⁾) は、初期のごっこ遊びの発達との関連で探索的遊び、関連づけの遊び、自己対象のごっこ、単一行為によるごっこ、系列のごっこといった5つの段階を設定し、獲得しつつある新しい段階に位置づけられる行為を精神遅滞児が豊かに展開できるよう援助する上での留意点を各段階について詳しく提示している。同時に彼らは、精神遅滞児に対してごっこ遊びの発達を促す具体的な試みを行っている。今野(1984)⁸⁾ は、健常児や精神遅滞児におけるごっこ遊びの発達・指導に関してこれまでなされたいくつかの研究を概観しつつ、特に精神遅滞児に対するごっこ遊びの指導上の基本姿勢について言及している。

ところで、ごっこ遊びについての発達の研究は、脱中心化 decenteration、象徴的行動(見立てる、ふりをする)、行為の系列化ならびに短縮化(張間・佐藤ら, 1981)⁹⁾、テーマや行為の立案 planning といったごっこ遊びに含まれるいくつかの要素を統合させての全体的視点とともに、それらの個々の要素ないし要素間の関連性(Watson & Jackowitz, 1984)¹⁰⁾といった視点からもなされている。精神遅滞児のごっこ遊びについても、要素的視点からの発達の検討(笹生・隅田ら, 1981¹⁾; 布施, 1979¹¹⁾)や発達援助(布施・1980¹²⁾; 神田・佐藤ら, 1980¹³⁾)を意図する研究が増加しつつある。しかしいずれも横断的ないし短期間の縦断的研究であり、精神遅滞児のごっこ遊びの発達を長期的かつ詳細に追跡・究明しようとする姿勢に乏しい。

本研究の主たる目的は、筆者がごっこ遊びに基づく指導により長年関わっている一人の事例を通して、精神遅滞児におけるごっこ遊びの発達について、特に行為の系列化、象徴的行動の2つの点から詳細に明らかにすることである。

行為の系列化については、調理・食事・入浴・就寝といった特定のテーマに根ざす二ないし

三種の行為を順序的に矛盾なく連結できるのが、健常児の場合2歳頃と言われている(Fenson & Ramsay, 1980)¹⁴⁾。本研究では、対象児が特に興味を示し続けている調理活動に焦点を当て、それに含まれる行為の豊富化・系列化について把握を試みたい。調理活動は、ごっこ遊びの段階に移行する可能性を育てつつある精神遅滞児たちが比較的共通して好む活動である。また調理活動の充実化(調理行為の多様化・系列化)は、食事、お誕生会、お菓子屋といった種々の身近なテーマやそのテーマに規定される種々の役割についての認識を支柱とする一層社会化されたごっこ遊びの獲得に役立つと言えよう。

次の象徴的行動であるが、本研究では、対象児がごっこ遊びの中で長い期間に渡って用い続けているペグ(木製の円柱、直径2.5 cm、長さ5 cm)に焦点を当て、それによってどのような象徴的行動が展開されたか、明らかにしたい。同時に、ペグといった非具象的遊具(ミニカーやままごと道具などとは異なり、対応する実物を持たず特定の使用方法の定まっていない事物。粘土や積み木なども含まれる。神田・張間ら、1981¹⁵⁾)がどれほど多様な象徴的行動を引き出す可能性を有しているのか、明らかにしたい。笹生・隴田ら¹⁾は、健常児と精神遅滞児の両者について、MAの増大に伴い見立て能力が①実物の模倣的使用(実物ないし実物大の玩具を慣習的な方法で用いる)、②実物に類似した小玩具の模倣的使用、③形態類似物の見立て使用(たとえば長い木片を包丁の代わりに用いる)、④身ぶり使用(実物たとえば歯ブラシ使用時の動作を、実物がない状況で再現)、⑤固有の機能を有する形態非類似物の見立て使用(たとえばミニカーを受話器にする)といった方向で進展することを、見出ししている。象徴的行動についてのこれまでの発達の研究では、笹生・隴田らに見られるように象徴的行動のいわば「タテの発達」に関する究明のみが先行し、「ヨコの発達」、すなわち特定の段階に位置づけられる象徴的行動の多様化や、特定の事物による象徴的行動の量的増大についての究明が、著しく遅れていると思われる。

II 方 法

1. 対 象 児

K. F. (男、以下、K児と略記)昭和51年5月16日出生。K児出生時、父33歳、母28歳、長男3歳。出生時体重は2,850 gで安産であったが、出生一週後、黄疸により2日入院。非常に静かで、弱々しい泣き声の子であったという。一人歩きの開始(2, 3歩ひとり歩く)は1歳6か月頃。津守式乳幼児精神発達診断法によると、4歳11か月時は運動24~30か月、探索・操作24か月、社会21か月、生活習慣36か月、言語15~18か月、6歳時は運動36か月、探索・操作36か月、社会36か月、生活習慣36か月、言語21か月、6歳11か月時は運動72か月、探索・操作42か月、社会48か月、生活習慣48か月、言語24か月である。どの領域についても彼なりの成長の姿が認められる反面、全般的な遅滞とともに言語の面(特に表出)での発達の顕著な遅滞をも認めざるを得ない。8歳の時点でも、オトタン、センセー、オイデ、バガ、バイバイ、バス、パン、ジュージュなどの語は発するものの、発語量、品詞の種類(特に助詞、副詞、形容詞)いずれも非常に乏しく、語の連鎖も僅少である。一方、言語の理解面との関連では、5歳11か月時実施の絵画語彙発達検査(PVT、上野一彦らによる)により、3歳6か月という語彙年齢が得られている。性格的に明るく人なつっこい反面、多動・注意散漫の傾向もあるが、昭和54年3月の時点での検査では、脳波の異常は認められず。4年間の保育所経験を経て、昭和58年4月某大学教育学部附属養護学校に入学。7歳10か月時に養護学校でなされた身体計測で身長106.4 cm、体重18.2 kg、胸囲57.0 cm、座高63.0 cmであり、身体面での発育遅滞も認めら

れる。

2. 指導の概要

K児の仲間として指導者自らが遊びに参加しつつごっこ遊びの発達を徐々に促すこと、日常生活を通して蓄えつつある遊ぶ力を十分発揮できる内容のごっこ遊びを導入・展開する中で、言語や相互交渉能力の発達を促すことを主なねらいとして、昭和57年4月17日より原則として週1回、約1時間30分の指導を、大学内教室において筆者・学生共同で実施(現在も継続中)。各回の指導場面におけるK児や指導者の行動の全容は、VTRにより録画され、また観察者によって詳細に記録された。さらにそれらの記録に基づく打ち合わせが、次回の指導の前日になされた。そこでは、K児の行動についての詳細な理解や解釈、ならびに前回の指導に関しての反省がなされるとともに、導入する場面(テーマ)、そのテーマの下に指導者が演示したりK児に遂行を求める行為、テーマに沿った遊びの展開に必要な遊具、ごっこ遊びの楽しさの醸成や言語ならびに相互交渉能力の発達に向けての指導上の留意点といった諸側面から、次回の指導方針が定められた。一方、実際の指導場面に際しての遊びのテーマの選択、テーマに沿ったストーリーの展開、遊具の選択についてはあくまでK児の自主性を尊重し、指導者の側が示唆的に投げかけた事前の計画(たとえば、「今日はお菓子屋さんやるのかな?」「ラーメン作りが上手だから今日は食堂を開いたらどうか」「こっちのお家を学校にしたら?」)を参考にしつつK児が遊びを創造・先導して行けるよう、配慮した。

なお、これまでのごっこ遊びの中で使用された遊具は、以下の通りである。

カーテンのついた窓のある家2台(折りたたみ式)。人形(父・母・子の家族人形、友達人形、子熊。いずれも35cm程度の身長)。円柱型ベグやプラスチック製キューブ(多量、色は種々)。粘土。電話(電池挿入、通話可能)。紙製の郵便箱や柱時計。タオル(実物)。人形用寝具。絵カード。種々の調理・食事用具(ままごと道具:トースター、ナベ類、フライパン、茶碗、カップ、包丁、マナ板、ハシ、スプーン、お盆など)。ビニール製手下げ袋。紙製のお金。種々のお菓子や野菜、魚が描かれた厚紙3枚(開こうとするお店屋の種類を選択に際しての手がかり、または、お店屋の看板として、用いる)。

毎回の指導に際してK児との遊びを直接担当する指導者は、大きく二手に分かれる。一方は、K児のそばにいて、父役、母役として人形を操作しながら、K児のごっこ遊びの展開、言語や相互交渉能力の発達を促す指導者である(普通2名。以下、 T_1 と略記)。他方の指導者(2名。以下、 T_2 と略記)は、K児・ T_1 とは離れた所に家を設定している。 T_2 は、友達人形や子熊人形を操作しつつ、時にはK児の側とは直接関わらずに自分達のごっこ遊びを展開したり、時にはK児の側での遊びの展開に合わせて、K児達をお客さんとして招待したり、逆にお客さんとしてK児達が開くお店に行ったりする。

注

筆者らによるとK児の指導は、昭和56年4月18日から始められている。しかしごっこ遊びの発達援助を重視した指導は、昭和57年4月17日からである。本研究では、この日以降を中心に結果を提示したい。

Ⅲ 結果と考察

1. 行為の系列化（調理活動との関連で）

表1（次頁）には、6歳以降の指導過程においてK児がナベやフライパンを用いて行った調理活動について、比較的長い行為系列から成り、しかもその系列の中に含まれる行為のすべてがTからの指示や示唆（たとえば「コンロに火はつけないのかな？」）によらず自発的に展開されたものだけが、ビデオテープと行動記録に基づき抽出・記録してある。

表1に見るように、考察の便宜上、調理過程は準備Ⅰ、準備Ⅱ、調理、盛り付け・付与の4つの部分に分けられている。ちなみに6歳前では、ナベやフライパンによる自発的な調理活動は見られず—それらを自分の手元に揃えるのだが—、手の平で叩く・こぶしで叩く・ちぎるといった粘土に対する種々の変形的操作の連結を圧倒的に多く示した。また、種々の変形的操作を加えた粘土をカップに入れたり自分の口元へ近づける（食べるふりは示さず）というような系列化が、若干認められた。

6歳5か月頃より準備Ⅱや調理に位置づけられる諸行為が出現するが、その中にはナベないしフライパンに独自の調理行為も見られる（ナベ・中の粘土をかきまぜる。フライパン・中の粘土を手や道具で平たくする、裏返す）。7歳以降、味見や調味料の添加などごっこ遊びの楽しさを増幅させるような行為を、特にナベによる調理の中で数多く示している。このことには、象徴機能の発達や調理活動をめぐる生活経験の豊富化といった要因の他に、昭和58年7月1日以降の指導場面の中には、具体的かつ豊富なイメージに基づく計画的な調理活動を促すべく、ラーメンやパン、お菓子などの紙カードが導入されていることも、関連していると思われる。7歳後半には、コンロのスイッチ操作や調味料添加の際に「ジュー」と擬音を加えたり、「シュルシュル」、「パン」などと自己の調理計画をTに自発的に伝えるというように、調理行為の豊富化とも関連しつつ発声・発語への意欲・挑戦の高まりが認められる。

ところで、CAの増大につれ調理に位置づけられる行為は増加・複雑化するが、このことが盛り付け・付与への移行やその充実化に必ずしも直結しないことに、留意する必要がある（59. 4. 27のナベによる調理活動や59. 4. 20のフライパンによる調理活動）。ナベによる調理過程について見ると、6歳台では調理部分の欠如が、7歳後半（7歳11か月）では比較的少数の行為から成る調理部分の展開が、盛り付け・付与に位置づけられる行為の出現に結びついている。調理活動は、調理部分に位置づけられる種々の行為の遂行に魅了され後続の部分への移行がなされにくい形のもの、盛り付け・付与への意向あるいは行為結果の対人的利用といった動機の実現に向けて調理部分の諸行為が欠落ないし短縮化される形のもの、と拮抗しつつ、発展するものと考えられる。

健常児は、3歳以降、自分が作った物をみんなに買ってもらおう、食べてもらおうといった社会的動機に基づき、それに先行する行為を短縮することが可能になるという。短縮化には、単一行為の連鎖的反复の減少、複数の行為連鎖的反复の減少、単一ないし複数の行為連鎖的省略といった種々の形のものがあるが、それらについて、精神遅滞児をも含めての発達の研究がなされつつある（張間・佐藤ら、1980；¹⁶ Ito, Kanda, & Sato, 1983¹⁷）。今後は、行為の系列化の発達における「行為の多様化・豊富化」の路線と「行為の短縮化」の路線との相互関連性、単一ないし複数行為の連鎖的反复の意義（情緒の安定、集中力の増大、手指の操作性の増大、後続の調理行為の誘発など、精神遅滞児にとり必ずしも無駄としてのみ切り捨てられない側面を含んでいる）といった点についての究明も、必要と思われる。

次に、K児の調理活動に対するTからのはたらきかけは、「コンロに火はつけないのかな？」、

表1 調理活動の発展

年令、調理過程	準備 I	準備 II	
ナベを介しての調理活動の発展	6:0 昭和 (57. 6. 12)	①粘土を平たくする(手の平の粘土を別の手の平で叩く) ②平たくする(手の平で叩く)③平たくする(手の平で押す)④(②と同じ)⑤平たくする(こぶしで叩く)⑥(②と同じ)	⑦粘土をナベに入れる
	6:5 (57.11. 2)	①包丁で切る②細長くする(手の平でころがす)③細長くする(両手の平間・はさむ, ころがす)④包丁で切る	⑤ナベに入れる⑥ナベの取っ手を持ちナベを左右に動かす⑦ナベをコンロの上に置く
		①平たくする(こぶしで叩く)②両手の平間を移す③平たくする(①と同じ)④平たくする(手の平の粘土を別の手の平で叩く)⑤平たくする(両手の平・並べる, 押す)⑥(②と同じ)	⑦ナベに入れる⑧ナベをコンロの上に置く⑨コンロのスイッチを入れる
	6:6 (57.12. 7)		①ナベに入れる②取っ手を持ちナベを左右に動かす③ナベをコンロの上に置く④スイッチを入れる
		①固める(両手の平・包む, 押す)②平たくする(両手・重ねる, 押す)	③ナベに入れる④ナベにフタをする⑤ナベをコンロの上に置く
	6:8 (58. 2. 8)	①細長くする(両手の平間・はさむ, ころがす)②細長くする(手の平でころがす)③(①と同じ)④平たくする(手の平の粘土を別の手の平で叩く)⑤包丁で切る	⑥ナベに入れる⑦ナベをコンロの上に置く⑧ナベにフタをする
	7:9 (59. 2. 17)	①細長くする(手の平でころがす)②細長くする(両手の平・並べる, ころがす)③細長くする(両手の平間・はさむ, ころがす)④包丁で切る ＜①の事前, ラーメンの描かれたカードをTに見せる。④の行為中, 「チュルチュル」とラーメンを食べる音を発する—調理計画の自発的表示—＞	⑤ナベをコンロの上に置く
	7:11 (59. 4. 20)	①平たくする(手の平で叩く)②平たくする(こぶしで叩く)③包丁で切る ＜③と⑤の行為中, 「ジュルジュル」「ジュージュージュ」とTに伝える—調理計画の自発的表示—＞	④ナベをコンロの上に置く⑤ナベに粘土を入れる
7:11 (59. 4. 27)	①細長くする(両手の平間・はさむ, ころがす) ②細長くする(手の平でころがす)③細長くする(両手の平間・はさむ, ころがす)④平たくする(手の平の粘土を別の手の平で叩く)⑤包丁で切る ＜①の事前, 「ジュルジュル」とラーメンを食べる音—調理計画の自発的表示—＞	⑥ナベに入れる⑦ナベをコンロの上に置く⑧コンロのスイッチを入れる(「ジュー」) ⑤ナベをコンロの上に置く⑥粘土をナベに入れる⑦ナベにフタをする⑧スイッチを入れる	
フライパンを介しての調理活動の発展	6:0 (57. 6. 5)	①包丁で切る②丸める(両手の平間・はさむ, ころがす)③包丁で切る	④粘土を小ボールに入れる⑤小ボールからフライパンへ粘土を移す⑥フライパンをコンロの上に置く
	6:5 (57.11. 9)		①フライパンに粘土を入れる②粘土を平たくする(両手・重ねる, 押す)③平たくする(手の平で叩く)④フライパンをコンロ上へ
		①平たくする(こぶしで叩く)②平たくする(両手・重ねる, 押す)③平たくする(①と同じ)④両手の平間を移す	⑤フライパンに入れる⑥フライパンをコンロ上へ
	7:1 (58. 7. 1)	①包丁で切る	②コンロの上のフライパンに粘土を入れる
	7:9 (59. 2. 24)	①ちぎる②丸める(両手の平間・はさむ, ころがす)③ちぎる	④カップに入れる⑤フォークで, コンロ上のフライパンに粘土を移す
		①平たくする(手の平で押す)②平たくする(こぶしで叩く)	③フライパンに入れる④平たくする(こぶしで叩く)⑤フライパンをコンロの上に置く
	7:11 (59. 4. 20)		①粘土をフライパンに入れる②フライパンをコンロの上に置く
	7:11 (59. 4. 27)	①平たくする(手の平で叩く)②平たくする(フォークで押す)③平たくする(棒の両端を支え, 粘土の上で棒をころがす) ＜③の行為中, 「パン」とTに伝える—調理計画の自発的表示—＞	④フライパンに入れる⑤フライパンをコンロの上に置く⑥スイッチを入れる
①平たくする(手の平の粘土を別の手の平で叩く) ＜①の事前, Tが「卵焼きがひとつ足りない」と言うと, 大きくうなずき自分が作る旨伝える—調理計画の自発的表示—＞		②コンロの上のフライパンに入れる③フライパンにフタをする	
①ちぎる②丸める(両手の平間・はさむ, ころがす) ＜③…「パンパン」と, 調理計画(パン作り)の自発的表示＞		③コンロの上のフライパンに入れる④フライパンの粘土を平たくする(手の平で押す)	

調	理	盛り付け・付与
		⑧Tと人形の口元へ粘土を近づける
⑧(煮えるのを)待つ⑨ナベのフタを取る⑩ナベの中を見る(煮え具合の確認) ⑪ナベの中の粘土をかきまぜる(スプーンで)⑫ナベにフタをする⑬ナベをコンロの上に戻す⑭待つ		
⑤取っ手を持ちナベを左右に動かす⑥粘土をかきまぜる(ペグで)⑦取っ手を持ちナベを円状に動かす⑧取っ手を持ちナベを上下に動かす⑨かきまぜる(スプーンで)⑩粘土をフォークで裏返す⑪フォークで突つく		
⑥待つ⑦取っ手を持ちナベを左右に動かす⑧ナベのフタをとる⑨フォークで突つく⑩ナベにフタをする⑪ナベをコンロに戻す		⑥ナベのフタを取る⑩ナベから皿に粘土を移す(ハシで)
⑥味見(ハシで粘土をつまみ口元へ)⑦調味料添加(小ナベを粘土の上で傾け、「ジャー」)⑧粘土をかきまぜる(ハシで)		⑨粘土をご飯茶碗に移す
⑤調味料添加(粘土の上でコーヒの空き瓶を傾け、「ジャー」)⑥ナベをコンロから下ろす⑦粘土をかきまぜる(ハシで)		⑧粘土をご飯茶碗に移す(ハシで)
⑧取っ手を持ちナベを左右に動かす⑨味見(ハシでつまみ口元へ)⑩調味料(急須を傾ける)⑪調味料(小ナベを傾ける)⑫かきまぜる(ハシで)⑬調味料(ペグを傾ける)⑭調味料(積み木をつかんだ右手の甲を左手指で軽く叩く)⑮調味料(ペグを上下に振る)⑯(⑮と同じ)⑰味見(ナベの汁一想像物一を茶碗に入れて口元へ)⑱(⑱と同じ)⑲(⑲と同じ)⑳調味料(ポットを傾ける)㉑(⑲と同じ)㉒(⑲と同じ)		
		⑦フライパンをコンロから下ろす⑧フライパンからナベに粘土を移す
⑥柄を持ちフライパンを円状に動かす⑦フライパンの中の粘土を平たくする(スプーンで叩く)⑧フライパンをコンロに戻す⑨(⑤と同じ)⑩待つ		⑩フライパンのフタを取る⑪フライパンを人形の前に差し出す
⑦フライパンの中の粘土を平たくする(スプーンで叩く)		⑧粘土を茶碗に移す⑨人形に食べさせる(スプーンで)
③フライパンの粘土を平たくする(横にした包丁の刃で押す)④平たくする(横にした包丁の刃で叩く)⑤(③と同じ)⑥(④と同じ)⑦粘土をフォークで動かす⑧平たくする(フォークで叩く)⑨調味料(茶碗をフライパンの上で傾ける)⑩(④と同じ)⑪調味料(ポットを傾ける)⑫粘土を包丁で裏返す⑬(④と同じ)⑭(③と同じ)⑮(⑮と同じ)		
⑥粘土を平たくする(横にした包丁の刃で押す)⑦包丁で粘土を裏返す		⑥粘土を皿に移す(手,包丁で)
⑥粘土をスプーンでつぶす		⑦フライパンをコンロから下ろす
③フライパンの粘土を平たくする(ハシで)④シャモジで裏返す⑤平たくする(シャモジで押す)⑥平たくする(シャモジで叩く)⑦(⑤と同じ)⑧(④と同じ)⑨(⑥と同じ)⑩(⑥と同じ)⑪(⑥と同じ)⑫フライパンの粘土を小ボールに移す⑬小ボールをコンロの上に置く⑭シャモジで裏返す⑮平たくする(シャモジで押す)		
⑦粘土を平たくする(フォークで叩く)⑧平たくする(フォークで押す)⑨(⑦と同じ)⑩柄を持ってフライパンを上下に振り,粘土を裏返す		⑪フライパンを傾け,粘土を皿に移す
④フライパンのフタを取る⑤フライパンの中を見る(焼け具合の確認)⑥フライパン返しで粘土を裏返す⑦平たくする(フライパン返しで押す)⑧フライパンをコンロの上に戻す⑨調味料(茶碗を傾ける)⑩調味料(積み木から茶碗に注いだもの一想像物一を,粘土にかける)⑪粘土に茶碗をかぶせる⑫茶碗を取る		⑫フライパンを傾け,粘土を皿に移す
⑤柄を持ちコンロの上のフライパンを前後に動かす⑥フライパンにフタをする⑦(⑥と同じ)⑧フライパンのフタを取る⑨柄を持ってフライパンを上下に振り粘土を裏返す		⑩粘土を皿に移す(手で)⑪フライパンを傾け皿に移す

「もう煮えたかな、見てちょうだい」、「みんなに分けてあげようね」といった「特定行為の示唆・指示」と、ナベにフタをする、ナベをコンロからおろす、スイッチを消してやるといった「行為の部分的代行」に大別される。これらのはたらきかけは、調理活動に対する企画力(誰・何のために、何を、どのような手順で作るのか)、その企画に基づく調理活動の展開力、調理行為のレパートリーといった点でのK児の現状・可能性を無視して頻繁かつ先導的・強制的になされるなら、それらの点での進展・増大の阻止はもちろんのこと、調理活動そのものへの興味・意欲の低減、調理活動を契機とするごっこ遊びの展開(たとえば、作った物をお店で売る)の阻止をも、結果しかねない。本研究では、K児による自発的な調理活動のみを考察の対象としたが、今後は、調理活動の発展における指導者の役割に関しても十分な検討を試みて行きたい。

2. 象徴的行動(ペグの使用との関連で)

表2, 表3には、K児の全記録(ビデオテープ・行動記録)の中からペグが象徴的に使用されている場面のすべてが抽出・記録されている。

表2 ペグによる、Tからののはたらきかけを契機とする象徴的行動(行為番号は出現順位)

A. 曖昧な象徴的行動	
CA	行為番号, 遊びの場面ならびに行為の内容
6:0	①…お店…「大根下さい」「ハンバーグひとつ下さい」といったT ₂ (客役)の注文に対して、ペグを渡す。 ②…お店…T ₂ が電話でコロッケの配達を求めると、ペグをバッグに入れてT ₂ の所に持って行き渡す。 ③…お店…「ケーキ売っていない?」とT ₂ が問うと、うなずく。T ₁ が「あるよ」と言って品物台(ワゴン)の上に置いてあったペグをK児に提示。K児はそのペグを見てうなずく。 ④…お店…T ₂ が「これはイチゴケーキだ」、「みんなケーキですか」とK児の側にあるペグを見ながら問うと、うなずく。(①, ②, ③, ④とも昭和57年6月5日) ⑤…お店…「バナナ下さい」、「トマト下さい」といったT ₂ の注文に対して、ペグを渡す。 ⑥…お店…「きゅうり下さい」とT ₂ が言うと、ペグを袋に入れて渡す。(⑤, ⑥とも57.6.12)
6:3	⑦…お店…「くだもの下さい」、「やさい下さい」というT ₂ の注文の各々に対して、ペグを袋に入れて渡す。(57.8.21)
6:5	⑧…お店…「おとうふ下さい」、「卵下さい」というT ₂ の注文の各々に対して、ペグを渡す。(57.10.26)
7:5	⑭…お菓子屋…T ₂ が「ケーキはないの?」と問う。T ₁ がK児のそばにあるペグを指さし「これK君焼いたケーキだよ」と言う。K児はそのペグを紙に包む。(58.11.11)
7:6	⑮…お菓子屋…T ₂ が「アメ下さい」と言うと、ペグを紙に包む。(58.12.2)
7:11	⑰…お菓子屋…T ₂ が「アイスクリーム下さい」と言うと、ペグを渡す。(59.4.20) ⑳…お菓子屋…T ₂ が電話で「ジュース売ってますか」と聞くと、ペグの入った箱を持ってT ₂ の家へ行きペグを渡す。(59.4.27)
8:0	㉑…お菓子屋…T ₂ が電話で「ジュース売ってますか」、「沢山ありますか」、「届けてくれるかな」と言う。K児は「ドージョ(どうぞ)」、「アエヨ(あるよ)」と言って、ペグの入った冷蔵庫をT ₂ に配達。一旦自分の店に戻ってから、ペグの回収のため再びT ₂ の家に行く。(59.5.25)
B. 象徴的行動	
7:0	⑨…入浴…T ₁ がペグを石けんに見立て、タオルを泡立てるかのようにペグをタオル(実物)に繰り返しこすりつけてみせ、さらにそのタオルで人形の体を拭く。K児もペグをタオルにこすりつけ、タオルで人形の体を拭く。(58.5.20) ⑩…入浴…K児、本物の石けんを捜すかのように水道に行く。「これ石けんにしよう」と言ってT ₁ がペグを与える。K児は、人形の髪を浴槽代わりの箱の中に入れてから(髪を湯でぬらしたつもり)、髪にペグをこすりつける。そして髪を手でかきまわす。(58.6.3)
7:1	⑪…動物園見学ごっこに向けてのおにぎり作り…T ₁ が「梅干」としてペグ、「ノリ」として木の葉を差し出すと、K児はペグを木の葉で包み炊飯器の中に入れる。さらにT ₁ が作った粘土玉にペグを半分位差し込む。粘土玉に比しペグが大きすぎ、粘土玉を介しペグを梅干、木の葉をノリとしたおにぎりは結局完成できず。(58.6.17) ⑫…誕生会に向けてのケーキ作り…T ₁ が「ケーキ」としてペグを立て、その上に「サクランボ」として小さい粘土玉を置く。K児はそれをローソクに見立てているようで、左手に持った別のペグに細い棒(枯れたツクシ)の先をすり付け、それを粘土玉に近づける。自分の持つペグをマッチ箱、細い棒をマッチ棒とし、ローソクに点火するふりをして。(58.6.24)

7:3	⑬…お店で「梨」として渡されたベグを家で食べる…T ₁ が「梨の皮むける?」と言ってベグを差し出す。K児はそのベグを左手に持ち、ベグに包丁(ミニチュア)を当てながら皮をむく行為を展開。さらに口にベグを少し触れさせ、口を動かし食べるふりをする。(58.9.9)
7:7	⑭…お菓子屋(食堂付き)…T ₁ が「(T ₂ に)お茶を入れてあげようか」とK児に言うと、K児はポットの中にベグを入れ、茶碗の上でポットを傾け注ぐふりをしながら「ジュージュ」と言う。 ⑮…⑭に続けて再びポットの中にベグを入れ、ポットを急須の上で傾け、さらにその急須を茶碗の上で傾ける(お湯をポットから急須、急須から茶碗へと移すふり)。(⑭, ⑮とも58.12.16)
7:11	⑯…お菓子屋…「(K君のお店では)アイスクリームも売ってるのかな。電話で聞いてみよう」とT ₂ が言うのを受けて、自分からT ₂ に電話。ベグに人さし指の先をつけ、その指先を舌でなめてみせる。T ₂ が「アイスクリームありますか」と問うと、「ウン」と答える。(59.4.20)
8:1	⑰…誕生会…「ジュースも飲んで下さい」と言ってT ₂ がベグをK児の前に置く。K児はそのベグを口に近づけ飲むふりをする。(59.6.22)

表3 ベグによる自発的な象徴的行動

A. 曖昧な象徴的行動	
CA	行為番号, 遊びの場面ならびに行為の内容
6:4	①ベグを入れた手下げ袋を持ってT ₂ の家の方に行く。「それおみやげ?」とT ₂ が問うと、うなづく。(57.9.18)
7:1	⑥…誕生会に向けてのケーキ作り…小さい盆の上にベグを沢山立てる。T ₁ が「ケーキ?」と問うと、「ウン」と答える。(58.6.24)
7:8	⑭…お菓子屋で売る品物作り…ベグを木箱の中に入れておく。T ₁ が「ジュースの準備はまだなの?」と問うと、うなづく。(59.1.27)
7:9	⑯…ジュースを買いにお店へ行く…店頭でベグを沢山取る。 ⑳…ベグをポットに入れる。T ₁ が「ジュージュ?」と問うと、うなづく。 ㉑…父役と母役のT同士の話…「おとうさんのどかわいたな。ビールがいいな」、「ハイ、ビール」とTが話し合っていると、K児はベグを持ってT(父)のそばへ。Tが「ビール持ってきてくれたの?」と言うと「ウン」と答えてベグを渡す。(⑱, ㉑, ㉒いずれも59.2.24)
8:0	㉒…お菓子屋…ベグをワゴンの上に乗せて並べる。T ₁ が「これはジュース?」と問うと、うなづく。(59.5.25)
B. 象徴的行動	
6:8	②…母人形が病氣, 看病…ベグをひとつつかんで自分の口元へ近づけ舌鼓を打つ。 ③…②に続けて、布団に寝かされている母人形の口元へベグを近づける。(②, ③とも58.1.25)
7:0	④…入浴場面…ベグとタオルを持ち、兄人形の背中にベグをこすりつける。(58.6.10)
7:1	⑥…誕生会に向けてのケーキ作り…ベグの大きな集まりの上にお皿を半紙をかぶせ、5、6秒後にその半紙をさっと取る(大きなケーキの完成)。 ⑦…誕生を祝う歌の後、ベグの集まりの中から一本のベグを取り、口へ近づけ口を動かし食べるふり。 ⑧…⑦に続き、皿に盛られた自分のベグを口へ近づけ、口を動かしケーキを食べるふり。(⑥, ⑦, ⑧いずれも58.6.24)
7:5	⑨…お菓子屋で売るためのお菓子作り…コンロのスイッチを入れてから、コンロのオープンの中にベグを入れる。T ₁ が「パン焼くの?」と問うと、うなづく。しばらく間を置いてからオープンの中を開け、ベグを取り出す。焼けたことを告げるかのようにT ₁ に向けてベグを見せる。(58.11.11)
7:6	⑩…お菓子屋で売るためのお菓子作り…「お母さんはジュース作ろう」と言って、T ₁ が母人形にポットを持たせる。それを見てK児は、ジュースを注ぎ入れるかのように、ポットの上でベグを傾ける。T ₁ が「何ジュースかな、ミカンかな」と問うと、うなづく。 ⑪…お菓子屋(食堂付き)…K児、冷蔵庫からベグを出してT ₂ (客役)に見せる。T ₂ は「それジュース?」と問う。K児は、ベグを持った手を横に振ってから「違う」の意、人さし指の先を口に軽く触れさせる。T ₁ が「アイス?」と問うと、大きくうなづく。(⑩, ⑪とも58.11.25)
7:8	⑮…お菓子屋で売る品物作り…ベグをポットに入れ、そのポットを4個のカップの上で傾ける。カップを盆の上に置く。(59.1.27)
7:11	㉓…お菓子屋さん…ベグの下部を他方の手で持ちながら、ベグの上部に対してあたかもクリーム(想像物)をつけるような行為をハンを用いてする。さらに指先を舌でなめる行為をしてみせる。T ₁ が「アメ?」と問うと、首を横に振る。「ソフトクリームか」と言うので、軽くうなづく。ハンでクリームをつけるような行為を得意気な表情で続ける。クリームのつき具合を確かめるかのように、頭を傾けたりしながらベグを見る。(59.4.20) ㉔…夕食作り…コンロにナベをのせ、粘土を入れる。急須、続けてベグをナベの上で傾け、何か(調味料)を加えるふり。T ₁ が「しょうゆ?」と問うが答えない。さらに、あたかも粉末調味料を加えるかのように、ナベの上でベグを上下に軽く振る。 ㉕…⑳の後、ベグをコンロのオープンの中に90度傾ける。数秒待ってからオープンを開け、ハンを用いてベグをお皿の上に取り出す。(㉓, ㉔とも59.4.27)
8:1	㉖…誕生会のケーキ作り…粘土を平たくし、その上にベグを横にしてのせ、ベグを粘土で包む。粘土から出ているベグの部分に小さい粘土玉を置き、T ₂ の方に見せに行く。T ₂ が「おいしそうね」と言うので、うなづく。 ㉗…誕生会…ベグを口元へ近づけ飲むふり。(㉖, ㉗とも59.6.22)

C. 象 徴 的 命 名	
7 : 8	<p>⑭…T₁が、K児と約束したジュースの買い物をおぼえる…「ジューチュ」と言って、ベグの入った箱をテーブルの上に置く。</p> <p>⑮に続けて、「ジューチュ」と言ってテーブルの上にベグを立てる。(⑭, ⑮とも59.1.27)</p> <p>⑯…朝食作り…ベグの入った箱を運びながら「ジューチュ」。T₁が「ジュース飲みたいの?」と問うと、「ウン」と答える。(59.2.3)</p>
7 : 9	<p>⑰…お菓子屋で売る品物作り…「ボーアチュ(僕アイス作りたい、の意にとれる)」と言って、アイスクリームの絵カードをT₁に見せる。それからセロテープをT₁に示し、2つのベグを長くつなぐよう求める。(59.2.17)</p> <p>⑱「ジューチュ」と言って、ベグの入った箱をT₁の所に持ってくる。(59.2.24)</p>
7 : 11	<p>⑳…お菓子屋開店前の朝食…ベグを冷蔵庫に入れる。「朝ごはん食べよう」とのT₁からの声かけに、「ジューチュ」と言う。T₁が「ジュース冷やすの?」と問うと、小さくうなづく。(59.4.20)</p> <p>㉑…お菓子屋で売るための品物作り…「ジューチュ」と言ってプラスチック製のプリン容器にベグを入れT₂の方に持って行く。T₂が「これ何だろう」と言う、「ジューチュ」と答える。(59.4.27)</p>
8 : 1	<p>㉒…誕生会のケーキ作り…「ジューチュ」と言ってベグをビニール袋から取り出し、小箱の中に入れる。(59.6.22)</p>
D. 象 徴 的 命 名 + 象 徴 的 行 為	
7 : 11	<p>㉓…夕食…「ジューチュ」と言ってからベグを茶碗の上で傾け、その茶碗を口につけ飲むふりをする。(59.4.27)</p>

ベグによる象徴的行動は、その出現の契機との関連で2つに大別された。ひとつはK児に対するTからののはたらきかけを契機として出現するものであり(表2, 応答的な象徴的行動と略記), 他のひとつはTからののはたらきかけを契機とせず自発的に生じたものである(表3, 自発的な象徴的行動と略記)。さらにベグによるK児の象徴的行動は、曖昧な象徴的行為, 象徴的行為, 象徴的命名, 象徴的命名+象徴的行為の4種に分類可能であった。象徴的行為とは、いわゆる「ふりをする行為」を伴い、同時に、たとえK児からの言語的命名がなくとも、その行為の明確さ、巧妙さ、前後の諸行為などに基づきベグが何に見立てられているかについての推定が比較的容易なものである。ちなみに河崎(1981¹⁸⁾)は、象徴的行為には虚構的行為(ふりをする行為)と事物の象徴的利用(見立て行為)の両面が含意されると、指摘している。一方、曖昧な象徴的行為として位置づけられる諸行為には、「ふりをする行為」が伴わない。応答的な象徴的行動では、Tの要求する事物の代理物としてベグを渡す、紙に包むといった行為が、曖昧な象徴的行為に位置づけられている。自発的な象徴的行動では、「それおみやげ?」「ジュース?」といったTによる見立てをK児がうなづくことによって受け入れることからかろうじて「ベグの象徴的使用」と認定される行為(たとえば、盆の上にベグを立てる。ベグをポットに入れる)が、曖昧な象徴的行為とされている。象徴的命名とは、ベグに対して代理物としての名称を付す行為を意味する。K児の場合、象徴的命名、象徴的命名+象徴的行為は自発的行動のみに認められること、象徴的行動は、内容的に、曖昧な象徴的行為、象徴的行為、象徴的命名、象徴的命名+象徴的行為といった順序で出現することを、表2, 表3がまず明示している。

次に、Tによるどのようなはたらきかけが象徴的行動の契機をなすのか明らかにすべく表2を検討した結果、以下のような種類のもので導き出された。

- K児に対して、ベグを代理物として命名・提示する。(行為番号⑩…入浴…「これを石けんにしよう」と言って、ベグをK児に渡す。他に③, ⑬, ⑳)
- K児に対して、ある事物の提出を求める。(①…お店…「大根下さい」「ハンバーグひとつ下さい」とK児に注文。他に②, ⑤, ⑥, ⑦, ⑧, ⑮, ⑲, ㉑)
- K児の手元にあるベグに対して、象徴的命名をする。(⑭…お菓子屋…K児のそばにあるベグを指さして、「これK君焼いたケーキだよ」と言う。他に④)
- ベグを代理物とし、それに即した使用法を演示。(⑨…入浴…石けんに見立てたベグをタオ

- ルにこすりつけ、そのタオルで人形の体を拭く。他に⑭)
- e. ペグを代理物とし、それに即した使用法をK児に求める。(⑪…おにぎり作り…「梅干し」としてペグ、「ノリ」として木の葉をK児に差し出す)
- f. ごっこ行為に関する自己の意向をK児に伝える。(⑫…お菓子屋…「(K君のお店では)アイスクリームも売ってるのかな。電話で聞いてみよう」と言う。他に⑬, ⑭)

象徴的行動の発達や発達援助に関する実験的研究においては、その方法として演示 modelling が用いられることが多い。一方上述の結果は、演示が、象徴的行動の出現や発達を促す上でのひとつの手法にすぎないことを、示す。換言すれば、子どもが興味を持ち意欲的に取り組めるテーマの遊びが展開され、同時に、子どもと指導者との間に共に遊びを支え展開させる仲間として十分親和的な関係が成立している場合には、子どもに対する指導者からの多様なはたらきかけが多様な象徴的行動を喚起すると言えよう。

ところで、表2、表3を通観すると、ペグのような非具象的遊具が、ケーキ、パン、アイスクリーム、ソフトクリーム、お湯、ジュース、梨といった飲食物へ、石けん、梅干、マッチ箱、ローソク、調味料容器など飲食物以外の物へと、実に多様な物に見立てられる可能性を有していることが分かる。そしてその見立て場面の多くでは、タオルを石けんで泡立てるふり(表2, ⑨)、マッチ棒に火をつけるふり(表2, ⑫)、包丁で梨の皮をむくふり(表2, ⑬)、注ぐふり(表2, ⑭, ⑮、表3, ⑯)というような「ふりをする行為」が示されている。そしてそれらの行為によって、石けんの泡、マッチの火、梨の皮、お茶、ジュースといった想像物が、いわば「生み出されて」いる。ペグは、象徴的行為を広げ定着させる、象徴的行為を高めるといった両面の機能を十分果たし得る素材として、K児の遊びの中に取り入れられている。

最後に、Tからのはたらきかけ、応答的な象徴的行動、自発的な象徴的行動といった点を同時に考慮に入れつつペグによる種々の象徴的行動の出現過程を導き出したものを、以下に提示したい。

- () 内には初発年齢と初発行為番号が記されている。
- (1) (6:0. 応答③) ペグによる象徴的行動の萌芽。ペグがある事物の代理物になりうることをTが示唆。Tの示唆によりペグを種々の事物の代理物として模倣的に用い始めるが、ペグ(能記)と事物(所記)の類似性・差異性に関する認識に殆ど欠けているため、ペグは何にでも浮動的に用いられる。
- (2) (6:8. 自発②) ペグが自発的に代理物として用いられ、所記に即した象徴的行為が遂行され始める。しかし、その行為が単純であり所記に関する言語的命名もなされないため、どれほど具体的かつ鮮明なイメージに依拠して象徴的行為がなされているか、所記は何なのか、といった点がTの側から把握困難である。
- (3) (7:0. 応答⑨) ペグについてのTによる見立ての積極的取り入れ。
- (4) (7:1. 応答⑫) ペグについてのTによる見立てにヒントを得て、各々異なる所記を意味する代理物としての複数のペグが、互いに関連づけられて象徴的に使用される。
- (5) (7:5. 自発⑨) 代理物としてのペグに対する一層複雑な象徴的行為の展開。
- (6) (7:6. 自発⑩) 自己の象徴的行為を通しての、Tのごっこ行為の展開に対する積極的関与。
- (7) (7:6. 自発⑪) ペグによる見立てについてのTによる推定を否定し、所記に即した象徴的行為により自己の意図する見立てを強調、伝達。
- (8) (7:7. 応答⑬) Tが自己のごっこ行為についての意向を伝えることにより、擬音を伴

った象徴的行為が惹起される。

(9) (7:8, 自発㉔) ベグについての象徴的命名。

(10) (7:11, 自発㉔) 象徴的命名と象徴的行為を伴った象徴的行動の自発的展開。

以上のようなベグによる種々の象徴的行動の出現過程が、果たしてK児にのみ独自のものか、あるいはより一般化されうるものなのかについての検討は、今後の課題として残される。一方K児のように言語の面での著しい遅れを伴う精神遅滞児、聴覚障害児、視覚障害児、自閉症児について、象徴的行動の可能性を的確に把握しそれに基づき効果的な指導を実現するためにも、象徴的行動の発達過程に関する体系的かつ詳細な究明、そのための方法論の確立を急ぐ必要がある。

IV 結 語

精神遅滞児のごっこ遊びに関する発達の研究、特に縦断的見地からのそれは非常に乏しい。本研究は、体系的な縦断的研究、そのための方法論の確立に向けての第一歩である。すなわち筆者が学生とともに長年指導に取り組んできた言語の面での顕著な遅れを伴う精神遅滞児を事例として、ごっこ遊びに含まれる2つの要素、つまり行為の系列化と象徴的行動の各々について、発達の様相の把握が試みられた。

調理活動に関する行為の系列化の発達過程では、煮る、焼く、調味料を加えるといった調理部分に位置づけられる諸行為に魅了され盛り付け・付与への移行が忘れられてしまう形の調理活動と、盛り付け・付与に向けて調理部分の諸行為が欠落ないし短縮される形の調理活動とが拮抗し合う姿が認められた。また、調理行為が豊富になるだけでなく、使用する用具(ナベかフライパンか)との関連でそれが分化する姿も認められた。象徴的行動については特にベグの使用に焦点が当てられ、ごっこ遊びの中でベグが様々な事物(所記)に見立てられ、同時にベグによって様々な「ふりをする行為」が展開されること、その展開が想像物の産出・使用といった状況を付帯する場合が多いこと、ベグによる象徴的行動を喚起する指導者からのほたらきかけには様々なタイプのものがあること、ベグによる象徴的行動はCAの増大につれその質を変えることなどが、明らかにされた。

本事例については、役割の認識、特定テーマ内での行為の系列化と複数テーマの系列化との関連性、¹⁹⁾ 言語、相互交渉能力といった点からも、今後さらに発達のな検討を続けて行きたい。

文 献

- 1) 笹生直江・嶋田征子・小川再治, 1981. 精神遅滞児における象徴的使用の発達—健常児との比較—, 日本特殊教育学会第19回大会発表論文集, P80~81.
- 2) Garwood, S. G. 1982.
Piaget and play: translating theory into practice.
Topics in Early Childhood Special Education, 2, 3, P1~13.
- 3) Yawkey, T. D. 1982.
Effect of parents' play routines on imaginative play in their developmentally delayed preschoolers.
Topics in Early Childhood Special Education, 2, 3, P66~75.

- 4) Hill, P. M. & Nicolich, L. M. 1981.
Pretend Play and Patterns of Cognition in Down's Syndrome Children.
Child Development, 52, P 611 ~ 617 .
- 5) Nicolich, L. M. 1977.
Beyond Sensorimotor Intelligence : Assessment of Symbolic Maturity through
Analysis of Pretend Play. Merrill - Palmer Quarterly, 23, 2, P 89~99.
- 6) McConkey, R. & Jeffree, D. 1979.
First Steps in Learning to Pretend. Special Education , 6, 4, P13~17
- 7) McConkey, R. & Jeffree, D. 1980.
Developing Children's Play. Special Education, 7, 2, P21~23.
- 8) 今野和夫, 1984.
精神遅滞児のごっこ遊びに関する考察—ごっこ遊びの発達ならびに指導を中心に— 秋田大学
教育学部教育研究所研究報, 第21号, P 143 ~ 153 .
- 9) 張間良子・佐藤弘子・神田英雄, 1981.
「ごっこ遊び」における行為の短縮化. 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, P 36~37.
- 10) Watson, M. W. & Jackowitz, E.J. 1984.
Agents and Recipient Objects in the Development of Early Symbolic Play.
Child Development, 55, P1091~1097.
- 11) 布施佐代子, 1979.
精神遅滞児における象徴的行動の発達. 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, P 420 ~421.
- 12) 布施佐代子, 1980.
精神発達遅滞幼児における遊具操作の発達—砂あそび形成過程の事例分析—. 日本教育心理学会
第22回総会発表論文集, P 468 ~ 469 .
- 13) 神田英雄・佐藤弘子・張間良子, 1980.
障害幼児における「ごっこ遊び」の形成その2.—遊び場面での tutoringの有効性と其の限界—.
日本教育心理学会第22回総会発表論文集, P 472 ~ 473 .
- 14) Fenson, L. & Ramsay, D. S. 1980.
Decentration and Integration of the Child's Play in the Second Year.
Child Development, 51, P 171 ~ 178 .
- 15) 神田英雄・張間良子・佐藤弘子, 1981.
中度精神遅滞児のごっこ遊びの発展に伴う文構造の変化. 聴覚言語障害, 10, P149 ~159 .
- 16) 張間良子・佐藤弘子・神田英雄, 1980.
障害幼児における「ごっこ遊び」の形成その1. 日本教育心理学会第22回総会発表論文集,
P 470 ~471 .
- 17) Ryoko Ito. Hideo Kanda. & Hiroko Sato. 1983.
Condensation of Play Activity in Normal Children and a Mentally
Retarded Child.
RIEEC RESEARCH BULLETIN (The Research Institute for the Education
of Exceptional Children, Tokyo Gakugei University).
- 18) 河崎道夫, 1981.
乳児期における象徴的行為の発達. 北海道教育大学紀要第一部C, 第32巻第一号, P233~247 .
- 19) 佐藤弘子・鈴木牧夫, 1983.
1・2歳児のテーマ遊びにおける行為の系列化について (3) 日本教育心理学会第25回総会
発表論文集, P 60~61.

付 記

筆者や学生のために、長年貴重な学習、研究の機会を与え下さっているK児とその家族の皆様に、心から感謝申し上げます。